
歴史資料でたどる江戸時代後期におけるクサガメの諸相

後藤康人

133-0056 東京都江戸川区南小岩5-21-11-503 えどがわ生物懇話会

Various aspects of *Mauremys reevesii* in the late Edo period traced through historical materials

By Yasuhito GOTO

EDOGAWA Social Meeting on Biology, Minamikojiwa 5-21-11-503, Edogawa-ku, Tokyo, 133-0056, Japan

はじめに

筆者はヒトとカメとの民俗事象を収集するために歴史資料を渉猟している。今回、江戸時代後期を生きた人々が記述した歴史資料を中心にクサガメ情報の集成を試みた。なお、橋口(2007)の試算によれば我が国の有史以来、江戸時代(1603-1868年)までの、和本の数は約45万点に上り、そのうち江戸時代に成立したものは90%を占めるといふ(残りの10%が古代から中世まで)。これはとても個人の力で網羅できるものではない。あくまで本稿執筆時点のものであることをあらかじめお断りしておく。

使用した資料について

資料は国立国会図書館・国立公文書館・東京国立博物館所蔵のデジタルアーカイブを使用した。それぞれの機関のWebサイト上で公開されているものである。ブラウザ画面で見える影印には書物の所有者のものとなる書き入れが視認できるものがあり、それが貴重な情報を含んでいる事例もあった。参照先を付したので詳細は各資料を参照されたい。

江戸時代後期のクサガメ情報の集成結果

江戸時代後期のクサガメ情報を集成したものが表1および図1である。推定される生息地は江戸・紀伊・近江・京・備後福山・筑前・筑後・豊後森だった。現在の都府県に置き換えれば東京・和歌山・三重・滋賀・京都・広島・福岡・大分に相当する(なお、図1中の○印は目安として現在の都府県域内に置いたものである。具体的な生息地域を示したのではないことを留意いただきたい)。

矢部(2002)が指摘する腹甲全体が黒く甲板境界の白い部分が狭い、いわゆる日本・朝鮮半島産タイプであることが判読できたのは江戸と備後福山のものだった。栗本丹洲(1756-1834)が描いた江戸城桜田外捕獲個体写生画(1824年作)は一見して明らかである。また、備後福山(現在の広島県福山市を中心とする地域)では当時その臭気からクソカメと呼ばれていたこともわかった。このことは和名クサガメとの関連を窺わせる。

小野蘭山(1729-1810)の本草綱目啓蒙(小野, 1805)に記述されている筑前・筑後、さらには小野の門人だった村松標左衛門(1762-1841)が自らの所有本(本草綱目啓蒙)に朱筆で書き入れた京・近江のものは「黄色」とあることから、矢部(2002)が指摘する中国産タイプと判断した。琵琶湖の魚介類を記録した渡邊奎輔(1781-1832)の淡海魚譜(渡邊, 江戸後期)も「黄色」と記述されている。栗本による豊後森産個体写生画(制作年不詳)は黄色い腹甲に黒い斑紋が入っている様子が観取できる。

紀伊では広く領内の各郡に生息していると記述されているが、腹甲についての描写は無かった。

表1. 江戸時代後期のクサガメ情報を集成したもの

場所	記述者	腹甲の描写	その他, 特記事項	文献名 (出版年)	参照
江戸 (桜田外)	栗本丹洲	黒, 甲板境界は白い線状	1824 (文政7) 年7月の 秦亀写生画	博物館蟲譜	東京国立博物館博物館図譜データベース http://www.tnm.jp/ 画像番号H001520027
江戸	岩崎灌園	黒, 象牙ノ如キ線道アリ	1824 (文政7) 年立秋の 手記「緑毛亀」	博物館蟲譜	東京国立博物館博物館図譜データベース http://www.tnm.jp/ 画像番号H0015346
紀伊	仁井田好古	記述無し	秦亀, 各郡皆産す, 日高郡にてクセント	紀伊続風土記 (1839)	国立公文書館デジタルアーカイブ http://www.archives.go.jp/ 請求番号175-0200
熊野	畔田伴存	記述無し	秦亀, 糞臭ノ気アリ	熊野物産初志 (1856)	国立国会図書館デジタルコレクション https://www.ndl.go.jp/ 請求記号859-99
紀伊 (貴志荘)	畔田伴存	記述無し	クソドンガ	野山草木通志 (1859)	国立公文書館デジタルアーカイブ http://www.archives.go.jp/ 請求番号197-0014
近江 (淡海)	渡邊奎輔	黄色	ヤマガメ, 臭気アリ	淡海魚譜 (江戸後期)	国立国会図書館デジタルコレクション https://www.ndl.go.jp/ 請求記号830-197
近江 (高島郡)	村松標左衛門	(黄色)	小野の門下生が所有本へ 書き入れ	(本草綱目啓蒙)	国立国会図書館デジタルコレクション https://www.ndl.go.jp/ 請求記号特1-109
京 (六条)	村松標左衛門	(黄色)	同上. 京方言ツチガメ 文化ノ比 (1804-1818) ヨリ京ニ多ク見ル	(本草綱目啓蒙)	国立国会図書館デジタルコレクション https://www.ndl.go.jp/ 請求記号特1-109
筑前	小野蘭山	黄色	秦亀, キンゴウズ, 臭気アリ	本草綱目啓蒙 (1805)	国立国会図書館デジタルコレクション https://www.ndl.go.jp/ 請求記号特1-109
筑後	小野蘭山	黄色	秦亀, キンクウズ, 臭気アリ	本草綱目啓蒙 (1805)	国立国会図書館デジタルコレクション https://www.ndl.go.jp/ 請求記号特1-109
備後福山	菅茶山	腹黒クシテ白キ 紋アルアリ	臭気アルラクソカメト云	福山志料 (1809)	国立公文書館デジタルアーカイブ http://www.archives.go.jp/ 請求番号175-0172
豊後森	栗本丹洲	黄色に黒い斑紋	秦亀写生画	博物館蟲譜	東京国立博物館博物館図譜データベース http://www.tnm.jp/ 画像番号H0015218

2020年3月20日現在 (筆者調べ)

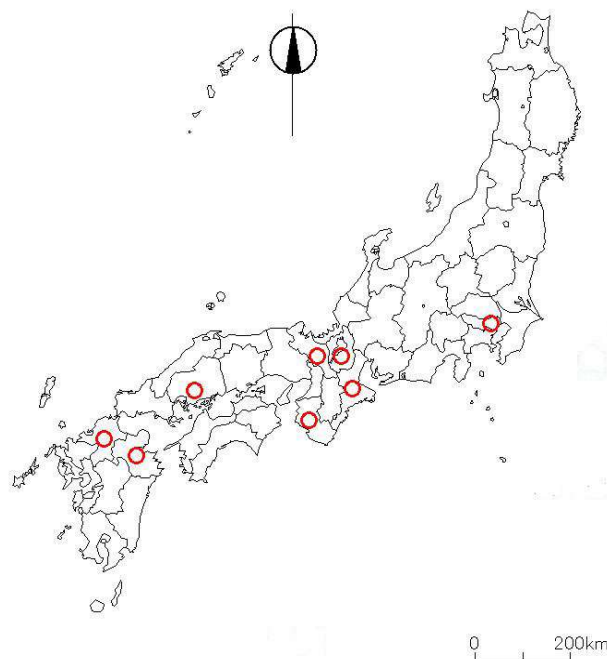


図1. 江戸時代後期の文献から推定されるクサガメ生息地(現・都府県に○印したもの)

考察

集成した資料は当時の自然科学者(本草家や医師)や海外文献(漢籍)に通じた知識層の手による一次史料であり、確度の高いものと判断してよいだろう。しかし、そうでありながらも資料から得られた情報は断片的であり、生息数や地域の詳細など多くは不明である。ただ、点在とはいえ生息場所は九州北部・山陽・近畿・東京と広い範囲で認められた。また、腹甲の外見も既に2タイプが存在していた。

中国の最も古い薬物学書とされる神農本草経(作者不詳, 1~2世紀頃成立)では亀甲は上薬(養命薬, 毒性がない)・中薬(養性薬, 使い方次第で無毒にも有毒にもなる)・下薬(治病薬, 有毒)の3分類のうち上薬に数えられている。漢方の伝来は朝鮮半島経由で我が国には5~6世紀頃に伝わった(小曾戸, 2014)。生薬名でクサガメの腹甲を亀板といい、栗本が描いた中国産個体写生画(制作年不詳)では甲羅だけでなく生体も舶来していたことが判読できる(後藤, 2016)。これらのことからクサガメが朝鮮半島や中国大陸から舶来する要因は古代から連続して潜在していたことが推察される。表1に示したクサガメ生息地の起源や経緯は多元多層的である可能性も考えられるだろう。

なお、近年のクサガメ分布状況(例えば日本自然保護協会, 2014)は江戸時代後期の諸相とは大きくかけ離れている。19世紀初頭から21世紀初頭にかけてのおよそ200年のうち、特に前世紀である20世紀に行われていた飼養目的の輸入や養殖などの経済活動, そこから派生したであろう逸走や放逐, 飼育者による遺棄の影響を改めて検証することが求められる。

謝辞

本稿は2020年2月24日に開催された第7回「淡水ガメ情報交換会の公開シンポジウム「クサガメを知る」」の口頭発表用にまとめた資料に再検討を加え、改めて構成したものです。主催の神戸市立須磨海浜水族園ならびに認定 NPO 法人生態工房の皆様, 共催の明石・神戸アカミガメ対策協議会の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 後藤康人. 2016. 栗本丹洲が記録した中国産クサガメ写生画2点. 爬虫両棲類学会報 2016(2):119-122.
- 橋口侯之介. 2007. 続 和本入門 江戸の本屋と本づくり. 平凡社, 東京. 298p.
- 呉晋・孫星衍・孫馮翼(編). 1000(江戸期写本). 神農本草経. 国会図書館デジタルコレクション (<https://www.ndl.go.jp/>). 請求記号特1-233. 書誌ID 000007555840.
- 小曾戸洋. 2014. 新版 漢方の歴史 中国・日本の伝統医学. 大修館書店, 東京. 264p.
- 日本自然保護協会. 2014. 日本自然保護協会資料集第53号「自然しらべ2013 日本のカメさがし!」報告書. 36 p.
- 矢部 隆. 2002. カメ目. p.723-727. (財)千葉県史料研究財団(編) 千葉県の自然誌 本編6 千葉県の動物 I 陸と淡水の動物(県史シリーズ 45). 千葉県, 千葉.
- ※表1の文献資料は重複するため割愛した。